

高等部作業学習におけるキャリア発達を支える製品開発 ～「ささやきの壁」陶片によるモビール製作～

梁 川 道 輔（弘前大学教育学部附属特別支援学校）

本研究では、高等部作業学習グループ陶芸班を対象に、卒業後の職場のニーズに基づく生産工程を作業学習に取り入れるとともに、教育学部美術教育講座富田准教授と製品開発ⁱに取り組み、キャリア発達を支える作業学習の在り方を探ることとなった。

開発にあたって、ナチュラルサウンドアーティスト高野昌昭氏が考案した環境音具「ささやきの壁」に基づき、生徒の実態と作業環境に応じた製品形態とした。

実践では、平成23年度を起点とし、陶芸班から2名の生徒を対象に、生産スキルから鑑賞者とのやり取りを通したコミュニケーション能力をはじめとするキャリア発達全般の育成について検証を行った。

キー・ワード：キャリア発達，作業スキル，コミュニケーション能力，就労意欲，進路実現

I. 問題と目的

本校には、知的障害のある生徒が在籍しており、地域で就労し生活するための望ましいキャリア発達が求められている。中央教育審議会答申ⁱⁱⁱ（平成23年1月）においても、就業に向けた支援方法の開発を推進することの必要性が示されており、特別支援学校学習指導要領^{iv}（平成21年12月）では、作業学習は、作業活動を学習活動の中心にしながら、生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習することが明記されている。

よって、本校では、作業学習を領域・教科を合わせた指導形態として教育課程の中核に位置付けてきたが、作業学習で作り出す製品自体の魅力や質、展開の在り方には検討の余地が残されていた。そこで、「ささやきの壁」の復刻に取り組んでいる教育学部美術教育講座富田准教授との作品開発を開始することとなった。

また、高等部に在籍する生徒の多くは、卒業後、生産工程・労務の職業に分類される進路先を希望している。職場では、定型作業を中心としたルーティンワークに安定して従事できるスキルが求められており、特に品質管理には精度が要求されている。同時に、品質管理に必要とされる状況報告や相談、品質改善といった基礎的なコミュニケーション能力や生産スキルが求められている。そこで、本研究では、生徒の進路実現に向けた作業学習を中心とするキャリア発達支援の有効性について検討することを目的とする。

II. 方法

1. 陶片によるモビール開発

陶片のモビール（写真1）は、複数の陶片を糸で結びモビール状に吊るしたものであり、陶片同士が触れ合う時に奏でる接触音の特徴とする。

陶片は、約6～8グラムとごく少量の陶土で成形され、ひとつのモビールは約130～200片で構成される。



写真1：陶片のモビール

2. 作業学習における製品作り

陶片のモビールは、複数の陶片の集合体であるため、作業量向上を目指すための作業製品としての条件に合致していた。また、計量の正確性、表面の均しをはじめとする品質の向上を意識するための工程を取り入れることができた。

作業学習では、生徒の実態に応じた単位時間あたりの目標数を設定し、進路先が求める生産性と正確さを目指して取り組むこととなった。

Ⅲ. 取り組みと結果

1. 対象生徒A（女）

平成23年度は、高等部第3学年に在籍している女子生徒を対象として実施した。対象生徒は、パン製造の職場への就労を希望しており、可塑性のある素材経験が求められていた。作業学習における陶片のモビール製作は、年間212時間（単位時間90分）実施した。使用する陶土は、校内で生成された再生陶土のため、粘度や水分量といった条件は一定ではなかったが、目標値を設定し既定の品質に達した陶片のみをカウントした。製作当初は、陶土の計量をはじめとする工程に時間を要し、200片に満たない生産数であったが、指先で適量をつまむ感覚が身につくと計量せずに既定量に収まるようになり、前期平均で525片、後期平均は731片となった。また、作品展（写真2）での他者評価が、対象生徒の自己肯定感につながり、製作意欲に還元されたことが考えられる。現在、対象生徒は、希望していたパン製造を主とする就労継続支援事業所に就労し、進路実現を図ることができた。



写真2：作品展

2. 対象生徒B（男）

平成24年度は、高等部第3学年に在籍している男子生徒を対象として実施した。対象生徒は、機械部品製造の職場への就労を希望しており、品質管理に必要とされる状況報告や相談、品質改善といった基礎的なコミュニケーション能力や生産スキルが求められていた。よって、対象生徒が製作した環境音具を、津軽地区の委託展示場所（禅林街、土手町等）に設置し、作り手と買い手・観賞者をつなぐコミュニケーションツールとしての有効性を調査することとなった。

調査方法は、展示場所に設置したアンケート用紙に鑑賞者からの感想、改善策、メッセージ等を記入して

もらい、作り手である対象生徒が結果を直接集計することで実施した。

アンケートは計45通集まり、励ましから、率直な改善策、購入希望まで多岐にわたった。集計の結果、肯定的な意見が大半であり、生徒の自己肯定感が高まったと同時に、改善策への意見を肯定的にとらえることで、どのように改善すればよいのかを考え、工夫しようとする姿勢が対象生徒に身に付いてきた。

以上の取り組みにより、自己肯定感と物作りへのモチベーションを高めた対象生徒は、希望していた機械部品製造の職場へ就職することができ、進路実現を図ることができた。



写真3：取り組みの概要図

Ⅳ. 考察

本研究における取り組みにおいて、陶片のモビール製作が知的障害のある生徒の就労に係る生産能力の向上と進路実現といったキャリア発達的一端を担うことを確認することができた。

展示会や委託店舗における販売では、作り手と買い手・観賞者をつなぐコミュニケーションツールとして、対象生徒からは、役割の自覚や自己肯定感の向上を確認することができた。

また、被災地支援ワークショップや地域への寄贈では、富田准教授を中心に普及活動を行い、さらなる展開が期待されている。今後、地域とつながる地場素材を活用した展開を進めていきたい。

（参考文献）

- ⁱ 平成23年度弘前大学附属学校共同研究 富田、梁川「特別支援学校作業学習におけるキャリア発達を支える製品開発」
- ⁱⁱ 「今後の学校におけるキャリア教育の在り方」（答申）第3章-4 平成23年1月 中央教育審議会
- ⁱⁱⁱ 「特別支援学校学習指導要領解説総則編（高等部）」419-420p 平成21年12月 文部科学省